

アリストテレースに於ける靈魂の構造

安 藤 孝 行

序

行爲とか作爲といふ事、即ち廣い意味での實踐は、行動の一種であるか、或は少くも行動を媒介とする。凡て行動は單なる心の働きでもなければ、單なる物の運動でもない。それは物と心との交互的な限定であり、隨てその主體も物的心的存在としての生物に限られる。生物の契機としての心を靈魂と言ひ、物を肉體と言ふとすれば、行動の理解の爲には靈魂と肉體の本質及びその關係を明かにせねばならぬ。更に實踐は單なる行動に止まらずして、理性的な行動であり、隨てその主體も亦單なる生物ではなくて、人間でなければならぬ。理性は靈魂の一種であるか、或は少くも靈魂の機能に於て現象する。そして實踐は單なる理性の活動でもなければ、單なる非理性的な靈魂の活動でもなくして、その交互限定である。隨て實踐の構造を解かうとすれば、靈魂に於ける理性の位置と、他の靈魂諸機能との關係を問はねばならない。更に又實踐は理性的行動であると言ふことは、それを單なる理性活動である觀想と區別せしめる所以である。そこで同じく理性と言つても、實踐に於けると觀想に於けるとでは、その本質或は現象形態を異にするであらう。由て我々は實踐を觀想と區別し、實踐理性と理論理性を比較検討しなくてはならない。又實踐と言ふ中には、初めに述べた様に、行爲もあれば、作爲もある。兩者の本質と差別、兩活動に於ける理性の現象形態の區別が次の課題をなす筈である。我々がアリストテレースに則し

て實踐の構造を解明するに當ては、以上の諸問題を順次探究すべきであらう。本論は「アリストテレースに於ける實踐の構造」の第一部として、先づ靈魂と肉體、靈魂に於ける理性の位置、及び靈魂の諸部分に就ての研究を意圖するものである。

一

或る對象を認識するに當つて、先づ之を一つの範疇に屬せしめると言ふことはアリストテレースの常套手段であるが、靈魂を以て實體であると言ふ時には、靈魂は單に實體の範疇に屬せしめられるに止まらずして、それ自ら或る意味で實體そのものとされたのである¹⁾。しかるに實體と言ふ概念は多義的であつて、或る時には質料が、或る時には形相が、又或る時にはその兩者より成る具體的な個物が意味される。アリストテレースは靈魂を論ずるに當つても、先づ實體にこの三種のあることを指摘した上、特に勝れて實體であるのは形相と質料の合成體としての物體であり、就中自然的物體即ち本性或は自然²⁾によつて組織された物體であると言ふ。然るに自然的物體には生命のあるものと、然らざるもの、即ち生物と無生物とがある。隨て自然的物體の一種としての生物は實體であり、且質料と形相の兩者より成ることは明かである。而も生物は生命を持つた自然的物體であるから、それは生命そのものと、生命なき物體とから構成されてゐる筈である。それではこの二要素の中、何れが質料であり、何れが形相であらうか。生命の原理は靈魂であり、生物が無生物と共に持つ物體的要素とは肉體に他ならない。しかるに肉體は或る主語的存在に就て述語となる様な屬性ではなく、寧ろ述語、屬性の歸屬するところの基礎或は質料である。だから生物に於ける形相的要素は靈魂でなければならぬ。靈魂が實體であると言ふ際の實體とは、形相の意味なのである。このことは特に我々の注意せねばならぬ點である。何故ならば我々は兎もすれ

ば質體と事ふ概念を有形の物體の如く考へ勝ちであり、アリストテレースのこの主張をば非科學的な原始的思想の様誤解するおそれがあるからである。併し實際上に於てアリストテレースは、靈魂は物體なしにはありえないが而も物體ではなく、物體に關する或ものであり、それ故に一定の物體の中にあると言つて居るのであつて、之は現代の心理學或は生理學の知識とさへ矛盾するところのない極めて進歩した思想と言ふことが出來やう。

我々は先に生物とは生命を持つた自然物であることを知つた。今生物の生命の原理が靈魂であり、靈魂は生物の形相的要素であるならば、靈魂とは生命を持つた自然物の形相であると言ふべきであらうか。併しこの表現はアリストテレースから見れば論理的に不完全である。生命を持つた自然物と云ふ表現には、既に生命として形相の概念が含まれてゐるから、生命を持つた自然物の形相と言へば、形相が重複することになる。形相の歸屬するところの基體は、嚴密に言へば、「生命を可能的に持つところの自然物」と言ふべきである。この様にしてアリストテレースは、靈魂とは「生命を可能的に持つところの自然物の、形相の意味に於ける質體」であると云ふ命題に到達したのである。⁴⁾

しかるに形相は質料の完成態であり、質料は形相の可能態である。⁵⁾だからこの「形相の意味での質體」は完成態であり、靈魂は肉體の完成態であると云ふ事になる。完成態 *entelechia* と云ふ概念も嚴密に言へば、二つの異つた意味を持つて居る。比喻を以て言へば、一は知識 *epistēmē* の如きものであり、他は觀想 *noēsis* の如きものである。知識は無知に對してみれば、既に形相を持つたものであるが、その形相は未だ完全な實現をなさず、或意味で可能態に止まつて居る。之が完全に實現したものが觀想の活動に他ならない。併し無知な者の持つてゐる觀想への可能性は、先づ以て學習を要するところの、全く受動的な可能性であるのに、知識の持つ可能性は、自ら觀想に迄發展し、又無知な者に對して教授することの出来る能動的な可能性である。可能性を現す

dyadic の概念も亦多義的であるが、之は屢、受動的可能に限定して用ひられる。そこで無知な者の持つ受動的な可能性が特に *dyadic* と云ふ名を獨占する時には、知者の持つ能動的な可能性は別に持性 *essence* と云ふ概念を以て現される。それは質料的、受動的な可能性に對して言へば、それ自ら形相の原理として完成態であるが、勝れた意味での完成態或は活動態 *dyadic* に對して言へば、未だ可能態を脱しない中間的狀態である。

それでは靈魂が完成態であると云ふのは如何なる意味に於てであらうか。靈魂といふものは、人間が醒めて居り意識を持つてゐる時のみならず、人々が眠つてゐる間にも存続するものである。それでなければ靈魂は睡眠によつて消滅し、覺醒によつて生起することになり、人格の統一、生物の生命の原理たるに足りないであらう。しかるに睡眠の覺醒に對する關係は、知識が觀想に對する關係に類する。そこで靈魂は觀想の様な意味ではなく、知識の様な意味に於て、肉體の完成態であると言ふべきであらう。言ひ換へれば、靈魂は生命を可能的に持つところの自然的物體の、第一の意味での完成態である。そしてこの様な生命を可能的に持つところの自然物は有機體であるから、靈魂とは又、有機的的自然物の第一の意味での完成態であるとも言はれるのである。¹⁰⁾ 言ふ迄もなく茲に第一の意味とは、勝れた意味といふことではなく、却てその反對に不完全な完成態のことである。換言すれば、靈魂は肉體の、第二の意味での可能態であり、その持性 *essence* なのである。

靈魂は有機的的自然物の形相の意味での實體であるから、それは又概念としての實體であり、この様な自然物の本質であると言ふ事が出來やう。¹¹⁾ 例へば、斧の様な道具が若し自然物であるとすれば、それが斧であることは斧の本質であり、斧の靈魂であるであらう。併し實際に於て斧は自然物ではなくして人工品である。だからこの様なことは唯比喩的にのみ言ひうることにすぎない。兎も角、斧の切斷作用や、眼の視覺や、靈魂に於ける覺醒狀態は完全な完成態であり、第二の意味での完成態であるが、靈魂そのものは、斧の切斷能力や、眼の視力の様な

不完全な意味での完成態、第一の意味での完成態である。そしてその基體としての肉體は更に之より低くして、唯單に斧に於ける鐵や、眼に於ける瞳の如く、質料としての可能存在たるにすぎない。斧が切れる鐵であり、眼が視力ある瞳である様に、生物は靈魂を持つた肉體であり、靈魂と肉體とから構成されるのである。¹²⁾

右の類比が明かに物語つてゐる如く、この構成とは恰も獨立に存在する物體が機械的に接合される様な仕方に於てではなく、有機的根源的な結合である。だからこそ「靈魂と肉體とが一であるか、他であるか」と云ふことは、封蠟と（之に捺された）印形、質料と形相とが一であるか他であるかと云ふ間にひとしい。¹¹⁾獨立に存在する靈魂と肉體とが、要素的機械的に結合して生物を造るのではなく、靈魂は肉體に於て働く力であり、肉體は靈魂がそれによつて自己を表現する道具 *organum* なのである。¹⁴⁾靈魂が肉體の完成態と考へられる限り、兩者が實在的に不可分なことは必然的である。若しそこに區別が存するとすれば、それは概念上の區別にすぎないであらう。端的に肉體を遊離した精神や、全く靈魂なき物體を豫想して、この様なものを實在と考へ、しかる後或は肉體を、或は靈魂をこの實在の假象として説明しようとする抽象的な唯心論や唯物論、さては又この様に全く獨立な兩種の實體間の部分的或は全面的な併行論といふ様な機械的な解釋が、近世に於て或は現代に逆行はれるのに較べて、アリストテレスのこの靈魂觀が極めて進歩した思想であることは充分注目し値するところと言はねばならない。¹⁵⁾

併し乍ら更に重要なことは、アリストテレスが單にこの様な有機體の本質の把握に於て現代の生理學或は心理學の基本思想を先驅したのに止まらず、進で靈魂の構造分析に及び、之に伴つて靈魂の不死性といふ宗教的實踐的な要請に迄哲學的な解釋を試みてゐることである。即ち彼の學問的關心は、單に前述の様な考察からして、肉體と靈魂の別を概念的な區別に限つて、それに満足する程單純ではなかつた。何故ならば肉體の完成態である

限りに於ける靈魂が肉體と實在的に不可分であるとしても、若し直接肉體の完成態でない様な別種の靈魂がある
とすれば、この様な靈魂は必ずしも肉體と實在的に不可分であることを要せないのであらうからである。¹⁶⁾生物に於
ける生命の原理が靈魂であるにしても、凡ての靈魂が必ずしも生物の生命原理であり肉體の形相には限らないか
も知れぬ。それでは果してその様な、いはゞ超越的な靈魂といふものが存在するであらうか。

この様な問が成立する爲には、先づ靈魂そのものに種別のあることが要求されねばならない。しかるに均しく
靈魂を持つた生物の間に高等なものと下等なものの種別のあることは、正に靈魂そのものに種別のあることを物
語るものである。¹⁷⁾生物間のこの種別は、單に肉體の相異にのみ基くものではなく、之と相關的に靈魂そのものの
種別が認められねばならない。アリストテレスは、靈魂の種別を認めて之に相關的な肉體の種別を等閑に附す
る見解を斥けて、この様な考は恰も建築術が笛の中にも宿ると云ふ程不合理なことになると言つてゐるが、¹⁸⁾之
を逆に言へば單に肉體の種別のみを認めて、之に相關的な靈魂の種別を認めぬ場合にも同様の不都合を免れま
ない。彼が特にこの半面を述べなかつたのは、決してそれを看過したのではない。寧ろそれが取立てゝ述べるに値
しない程自明な事でもあれば、隨て又先哲の中にも斯様な背理を犯す者がなかつた爲に他ならない。

勿論靈魂に種別が認められても、それが完全に肉體の種別と併行するものであり、靈魂の契機にして肉體と關
りないものが認められぬ限り、超越的な靈魂といふものは許されないであらう。靈魂とは肉體の形相であると定
義して出發する限り、肉體を離れた靈魂の存在しないことは自明の理である。併し靈魂が肉體の形相であつて、
それ以外の何ものでもないと云ふことは、果してそれ程自明な眞理であらうか。否寧ろ我々にとつては、靈魂と
は思惟し、意欲し、情感するところの或るものである。更にアリストテレス的な考からすれば、その上に感覺
し、營養する等の諸の生命現象、或は之等諸活動の統體、乃至はその背後に想定されるところの或るものであつ

て、肉體の形相と言ふ如き觀念ではない。それでは靈魂が肉體の形相であると云ふ命題を初めから靈魂の定義として立てた上で、之を楯にとつて肉體を超越した靈魂の存在を否定するのは *Peitio principii* であると言はねばならぬ。實證的な精神からすれば、假令結局に於て超越的靈魂と云ふ様な觀念が否定されるにしても、この様な定義を確立するに先立つて、先づ以て與へられた事實としての靈魂の諸形態を仔細に比較觀察した上で、超越的靈魂の有無に對する斷定を下すのが正道であると思はれる。アリストテレスの採つた道も亦之であつたと言ふことが出来る。¹⁹⁾ 肉體の形相としての靈魂は、差當りは不動の定義としてではなく假説として理解されねばならぬ。

併し乍ら一體靈魂に種別を立てたり、或は更にその中のあるものを肉體から超越せしめると云ふ事は、必ずしもアリストテレスに初まつた考ではない。寧ろ歴史的にみればこの様な靈魂觀は却てアリストテレスがプラトーンから繼承した形而上學的遺産であつた。尤も前掲の肉體の形相としての靈魂と言ふ思想にしてからが、全くアリストテレスの獨創によるものとばかりは言ひ切れないものがある。この考に對してもプラトーンの中にその萌芽が認められない事はない。²⁰⁾ なるほど靈魂が肉體の形相であると言ふ限り、靈魂は肉體を離れ得ないであらう。この思想はプラトーンに求めることは出来ない。併しプラトーンが靈魂は生命の原理であり、之あることによつて肉體は生ける肉體としての機能を營むと言ふ時、之からアリストテレスの前掲の假説に至る道はそれ程遠いとは思はれない。相異は唯靈魂の可分離性を認めるか否かに存する。そして漸次明かにする筈であるがアリストテレスは靈魂の可分離性を制限こそすれ全面的に否定したのではなかつたのである。抑、アリストテレスをプラトーンの反定立としてのみ理解しようとするのは、非歴史的抽象的な觀方であり、アリストテレス哲學の眞相を捉へる道ではない。アリストテレスはプラトーンの反對者であると同時にその後繼者であつたこ

とを忘れてはならない。このことは決して單に矛盾として斥けらるべきではない。眞の反對者である爲には後繼者でなければならなかつたし、眞の後繼者である爲には又その反對者でもなければならなかつたのである。それは兎も角、客觀的にみて、肉體の形相としての靈魂觀の方が、生物學者としてのアリストテレースに適しいことは言ふ迄もない。而も彼が單に之に止まりえなかつたと云ふことは、彼が直接的にはプラトーンの形而上學的傳統の中にあつたと言ふこと、更に根本的には彼の中にギリシヤ精神の宗教的實踐的要求が脈動してゐたことを物語るものと言はねばならない。アリストテレースは單なる生物學者でなくして、同時に倫理學者であり形而上學者であつた。

プラトーンが靈魂を分つて、思考的なもの *τὸ νοητικόν*、意氣的なもの *τὸ θυμικόν*、欲情的なもの *τὸ ἐπιθυμητικόν* の三種としたことは周知のところである。アリストテレースの著述としてその眞僞の程を疑はれてゐる大道徳學は、同じく靈魂を有理的 *τὸ λόγικόν*、無理的 *τὸ ἄλογον* とに分つ二部分説をばプラトーンのものとして傳へて居るが、プラトーンの語るところによれば、この二部分説は彼に知られてはゐるが、その自説ではない。アリストテレースも亦心理學の中では、兩説の主張者をはつきりと區別して扱つて居るのである。之によつても三部分説がプラトーンのものである以上、二部分説が他の何人かに歸せられねばならぬことは明かである。恐らくはヒックスの言ふ様にこの説はプラトーン以前の通俗的見解であつて、之が彼の三部分説の基礎をなしたものと觀るべきであらう。アリストテレースはその初期の作品であるトピカ等に於ては、未だ主としてプラトーンの三部分説に隨つて居るのであるが、この説はアルニムの解釋によれば、同一靈魂の能力の別ではなく、靈魂そのものの質體的な分類である。機能的に分たれた部分はそれぞれ独自の活動を營む平行關係に立つて互に他の領分を犯すことのないものでなければならぬ。思考的、欲情的といふのが機能の別ならば、思考

的部分の中に願望 *Bökyon* があり、欲情的部分の中に欲望 *eröpfung* が生じて、兩者が衝突するといふ様な現象は認められない筈である。しかるにこの三分分説に於ては、その各部分がそれぞれ特殊な理性能力や意志能力を持つて互に相争ふとされてゐるのである。この様な靈魂區分が例へば球を外から見れば凸面であり、内からみれば凹面であると言ふ様に、實體的に不可分な同一物の見方の相違でないことは言ふ迄もない。單なる見方によつて分たれた兩部分の間に右の様な葛藤を生ずる筈はない。してみれば靈魂のこの三分分とは、機能や見方の相違ではなくして、實體的にして實在的な區別であると見なければならぬと云ふのがアルニムの説なのである。

プラトーン的な三分分説が多分に實體的な區別であることは否定出来ない。そしてアリストテレスもトピカ時代には尙その師説の羈絆を脱しきれなかつたものであらう。併し心理學とか倫理學の様な中期以後或は後期の著作に至れば、單なる三分分説は批判し放棄されると共に、靈魂種別の原理に就ての反省が示されて來る。即ち、各種の靈魂といふものが存在するのか、或は同一靈魂に部分があるのか。若し後者であるとすれば、その部分とは概念的にのみ區別されるのか、或は場所的 *τοπος* にも分離しうるものであらうかと言ふ様な問が發せられる。茲に場所的²⁶⁾にと言ふのは、又數的に *αριθμητικῶς* にも分離しうるものであらうかと言ふ様な問が發せられる。か云ふ概念によつても現されるものであつて、アリストテレスが表現に苦しみ、之を模索した跡をうかがはしめる概念であるが、我々は之を單なる概念的區別に非ざる獨立存在として、略實體的或は實在的な分離と云ふ意味に解して差支なからう。²⁷⁾

先づ靈魂が概念的に區別出来ることに就ては疑の餘地がない。靈魂は明かに概念上種々に區別される。動物的な靈魂とか人間の靈魂と言ふ區別、或は營養的、感覺的、思想的と言ふ様な區別も、差當りは概念的な區別である。而もこの様な概念上の區別は、何よりも先に靈魂の機能をその區別の原理とするのである。²⁸⁾ それでは靈魂の

諸部分は唯機能的な區分に過ぎないであらうか。併しブレントノーは寧ろ單なる機能の別を離れた實體的な區別を認め、同一部分に二つ以上の機能を歸せしめるのが、アリストテレスの眞意であると解して居る。ブレントノーは靈魂部分を分つ原理は生物分類の原理であると考へるが、假令この様な區別を認めるとしても、生物の分類はその生活動の機能的な區別に基く他はないから、この様な區別の根柢には、先づ以て靈魂の機能的部分の區別がなされなければならない。この様にして分たれた諸機能の中、常に或る若干の機能のみを共有するところの生物の類のあるところから、之等一群の諸機能を擔ふところの基體として、靈魂の諸部分が分たれると云ふのがブレントノーの解釋である。この説の當否に就ては後に考察することとして、我々の當面の問題としては、その機能によつて分たれた限りに於ける靈魂の諸部分は、相互に如何なる意味での獨立性を有するかと云ふこと、詳しく言へば、それらは單にその區分の原理とされた概念的機能的區別を持つに止まるか、或は更に實在的な獨立性を持つことが出来るかと言ふことである。

靈魂の機能的に異なる諸部分が實在的に獨立性をもつか否かと言ふことは、ある機能が肉體から獨立して働くか否かと言ふ問と關聯する。若しその様な機能があると言へば、この機能を持つ部分は實在的に他の靈魂部分と可分的であらう。何故ならば、靈魂と肉體が實在的に全く不可分であるか又は全く可分的であるならば、之等の部分が相互に實在的な可分性を持つか否かは不定であらうが、靈魂の或る部分が肉體と可分的であり、他の或る部分が不可分であるとすれば、靈魂のこの兩部分は肉體を媒介として相互に實在的に分離しうることが明かになるからである。しかるに靈魂の或る部分、例へば感覺的部分が肉體と不可分であることは明かである。隨て他の或る部分、例へば思考的部分が肉體を離れてその機能を営みうるか否かと云ふことが、靈魂部分相互の實在的可分性の有無を解くところの鍵となる譯である。それでは果してその様な特殊な靈魂の機能といふものがあるのであ

らうか。

心理學第一卷第一章中にはこの問題に對する手掛りを提供する様な言葉が見出される。そこでは靈魂の *ψυχή* が靈魂に固有であるか否か、即ち肉體をまたずしてありうるか否かと言ふ問が發せられ、その答として次の様に述べられて居る。「多くの場合に於て、例へば怒り、勇み、欲し、總じてものを感じる如きは、(靈魂が)肉體なしには働きを受けたり *ψυχήν* 働きをおこす *ποιεῖν* ことはないやうに見える。唯思惟することのみは最も靈魂に固有な様である。併し若し之も亦一種の表象 *συνταξιμὰς* であるか、或は表象なくしてはありえないとすれば、之も肉體なくしてはありえないことにならう。してみれば、若し靈魂の働き *εὐνοία* 又はその受働 *παθημὰς* のうち、何か靈魂に固有のものであれば、靈魂は肉體を離れてありうることにならうが、若しそれに固有なものが無いならば、靈魂は可分離的 *χωριστὴν* ではないであらう。むしろ靈魂は恰も眞直である限りに於ける眞直なものに似てゐる。それには多くのものが附帯して居る。例へばそれは眞鍮の球と一點に於て接する。けれどもその眞直なものは獨立してそのみではこの様な接觸をしないのである。實際眞直であることは、常に或る物と共にあるのだから、不可分なのである。そして靈魂の *ψυχή* も亦凡て肉體と共にある様にみえる。即ち憤怒とか、穏和とか、恐怖とか、憐憫とか、勇氣とか、尙又歡喜や愛することや憎むことの如きである。と言ふのは之等と同時に肉體も亦或る變容をうける *παύειν τε* からである。」

右の文章に於て問題になるのは *ψυχή* と言ふ概念の意味である。*ψυχή* は言ふ迄もなく受働を現す *παθημὰς* の名詞形であり、受動的状態、變容を言ふのであるが、具體的には廣義に於ては存在の様態一般を現し、狹義に於ては感覺や感情の様な特殊の心理活動を意味するのである。今若し前述の命題に於けるパテーを廣義に解して靈魂の様態一般、隨て機能一般を指すとすれば、それが肉體を離れてありえない限り、靈魂は實在的には全く肉

體を離れないと言はねばなるまい。併し若し之を狹義に限つて、感覺の様な特殊の心理現象を意味するものとすることが許されるならば、パターが肉體と不可分であるからと云つて直ちに靈魂が全然肉體と不可分であることにはならない筈である。ところが茲に靈魂のパターの例として擧げられてゐるのは、怒り、勇み、欲することであり、而も之等が「總じて感ずること」であると言はれてゐる。尤もこの「總じて感ずること」と云ふ句は、之に先立つ三つの感情を總括したのではなく、嚴密には欲求に屬するところの之等のパターとは區別された、感覺一般を指すと解けないこともない。併しそれにしても怒り、勇み、欲すること、感覺一般を以てしては、尙靈魂の全機能を盡すに足りない。のみならず後半に繰返されてゐるパターの列擧も、その他之に類する二三の敘述に於ても、その例は常に憤慨、穩和、恐怖、寛大、果敢、喜悅、愛情、憎惡の様な感情に限られてゐるのである。又右の文中にも受動或は變容 *passivity* に對して能動或は機能 *activity* が區別されてゐるが、或箇所では同様に靈魂の受動と能動と云ふ對概念が用ひられ、その例として思考、感覺、快樂が掲げられてゐる。この中思考はパターとは區別されたエルゴンに屬するものと思はれる。この様な根據からすれば、この場合のパターとは狹義に解さるべく、靈魂の肉體からの實在的可分離性を全面的に否定するには足りない様に思はれる。

併し乍らそれでは「思惟することも亦一種の表象であるか或は表象なくしてはありえないとすれば、之も肉體なくしてはありえない事にならう。」と云ふ一句は如何に處理されるか。之はパターが思惟をも含むところの廣義の様態であり、靈魂機能は例外なく肉體と共にあり、之を離れないといふ主張と解する他はないのではなからうか。この箇所に對するヒックスの註釋に於てもパターは感情の如き特殊の心理活動に限らず、様態一般と解されるから、靈魂は一般に肉體と不可分であり、その部分相互も亦實在的には不可分であるといふ事にならざるをえない。假令パターを狹義に限るとしても、尙思惟が表象を必然的な條件として豫想するとすれば、理性が肉

體から實在的に分離する可能性は脅されざるをえないであらう。即ち假令思惟が靈魂の能動態であつて受動態ではないとしてさへ、之亦同様に肉體を離れなければ靈魂は凡て肉體を離れえない譯であつてパテーの廣狹を論ずるのは無意味であると言ふことにならう。

茲で炯眼な讀者は一つの試案を提出するかも知れない。右の引用文に於ては、思惟が表象の一種であるか又は表象を欠きえないと言ふことは、假言命題として現されてゐるのみであつて、定言的断定が下されてゐる譯ではない。だから思惟が表象を離れてはありえないと云ふ事はアリストテレス自身の思想ではなく、アリストテレスは單にこの假定の上に一時假の結論を引出したのみではないか。なるほど單に右の命題の關する限りこの様な解釋も出來ない事はない。併しそれは唯この命題に就てのみ可能な假説たるに過ぎない。親しくアリストテレスに就てみれば直ちにこの解釋の維持すべからざることが知られるであらう。右の命題は決して單なる假定に止まるものではなく、アリストテレス自身の積極的主張が暫らく假言命題の形をとつて現れた場合にすぎぬ。

この様な控目な表現法が採られた譯は、この文章が著書の冒頭にあり、その詳細な考察は後に至つて漸く展開さるべき課題をなしてゐる爲に他ならない。そして右の假定は後に至つて屢肯定的に再認される。實際「靈魂は表象なしには決して思惟しない。」とか「思惟しうる能力は諸々の形相とその表象の中で思惟する。」とか或は「感覺と共にでなければ外物を思惟しない。」と云ふ様な定言的肯定命題は至るところに散見するのである。

思惟が表象を豫想し、表象が肉體を豫想すれば、思惟能力たる理性も肉體と不可分であらう。既に最も肉體から可分的の様にみえる思惟又は理性さへ肉體を離れえないとすれば、ましてや其他の靈魂機能や靈魂部分が肉體と可分的であるとは考へられない。それでは我々はやはり靈魂のパテーとはその様態一般であり、單に受動的様態たる感情の如きものには限らず、凡ての機能を包含すると解すべきであらうか。實際又我々が右にパテーの意

味を狹義に限らうと試みた論據は、嚴密に言へば單に蓋然的であつて必然的とは云ひえないものであつたのである。併しこの様に解しきへすれば一切の困難が氷解する譯ではない。それどころか我々はこの道をとつても再び之に矛盾した見解に撞着するのである。即ちアリストテレスは靈魂の諸部分又は諸機能が、概して肉體と不離であることを認め乍ら、他方に於て「唯理性のみは他の類に屬するものであり永遠なるものが可死的なるものから離れてありうる如く、(肉體から)可分離的である」とか、「理性は恐らく一層神的であり非受動的である」とか、「理性のみは外より來り、之のみが神的である。何故ならば肉體の活動は之の活動には關らないからである。」¹⁰⁾等と言ふ。感覺能力が激しい感覺の後では感覺しえないのに、理性に於てはこの様な障害のないことの理由も亦「感覺能力は肉體なくしてはありえないのに、理性は可分離的である」ことによる。理性のみが肉體を離れうる點に於て、靈魂の他の諸部分が實體的に不可分的であり唯概念的にのみ區別されるのと相異する。¹¹⁾之等の命題は、理性が表象の一種であるか少くも表象を要件とすることによつて必然的に肉體と結合し、之と不可分であると云ふ前述の思想と眞向から矛盾するものではなからうか。我々は茲に極めて困難なアポリアに撞着した、この難問は果して如何に解決さるべきものであらうか。

- 1 嚴密には靈魂の實體(本質)を問ふことと、靈魂を範疇としての實體に歸屬せしめることと、靈魂を(肉體の本質の意味での)實體となすこととは、それぞれ區別されねばならぬ。De An. Ar. 402^a7 「そこで我々の企てることは、それ(靈魂)の本性即ち實體を觀想し認識することである」の如きは第一の場合であり、Ibid. 402^a23 「そこで第一に恐らく必要であることは、(靈魂を)諸類の中のどれに割當てるかと云ふこと即ちそれが何であるかを定めることである。と言ふのはそれが或る特定のもの即ち實體であるか質であるか或は先に區別された諸範疇の中の或る他のものであるかを決定することである」は第二の場合に當るが、Br. 412^a19 等では靈魂を實體であると言ふのは第三の意味に解されねばならない。
- 2 De An. Br. 412^a6. 2. 412^a15. cf. Met. Zio. 1035^a2. 15. 1036^b21. H2. 1043^a19. I3. 1054^b1. A3. 1-70^a9, 12.

4. 1070b13.
- 3 De An. B2. 414a19. De Juvent. 1. 467b14.
- 4 De An. Br. 412a19.
- 2 Met. 68. 1050b2. a16. De An. Br. 412a10. 2. 414a17. cf. Met. H2. 1043a20. 3. 1043a33. br. A5. 1071a9.
- 9 De An. Br. 412a21.
- 7 Ibid. 412a9. Met. 16. 1048a34. Phys. 4. 255a33. De Sensu. 4. 441b22. Gen. Br. 735a9. Trendelenburg, De An. 314f. Bonitz, Met. II. 394.
- 8 De An. B5. 417a21-b15. 拙稿「ソリストキネーシスに於ける可能概念の諸相」哲學研究第三百號四八頁以下參照。又 Hicks' Note on 417a27. 參照。 De An. Br. 412b25. 「この靈魂を喪つてしまつた者が生きる様になる可能のものではなく、善の靈魂を持つてゐる者が生きるものである。」と言ふ如きは右拙稿に於ける可能或は特性の一方性の論を確證する有力な典據の一つである。(同前二百九十八號三四頁以下參照) 是は先の論文等では習性、把持性等と譯したが茲では單に特性と譯してゐた。特性 *hexis*, *proprrium* と混同なき様注意されたい。
- 6 De An. Br. 412a27.
- 10 Ibid. b5.
- 11 Ibid 412a19. b16. Met. Z10. 1035b14. 11. 1037a15. Gen. An. B4. 738b27. Met. H3. 1043b34. 概念 *λόγος* は形相 *εἶδος* の表現であり、本質 *οὐσία* *εἶναι* は存在着を完全に限定する最も特殊的な形相である。
- 12 De An. Br. 412b19-413a3. Met. Z11. 1037a5.
- 13 De An. Br. 412b6.
- 14 De An. B4. 415b18. cf. Zeller, Philosophie der Griechen II. 2. 486. Daeunker, Problem der Materie 262.
- 15 M. Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos. V. § 1.
- 16 De An. Br. 413a3. 「或は靈魂は肉體を離れえないこと、或は若し靈魂が部分に分れる様な本性を持つてゐるならば、それの或る部分は肉體を離れえないことは明かならぬことではない。何とならば或る部分に於ては完成態はその部分に屬するからである。併し乍ら若し或る部分が何等肉體の完成態でないならばそれが肉體を離れえても何等差支はないのである。」

Gen. An. B3. 736b21. Part. An. Ar. 641b10. 「何とならば靈魂の總體が動物の本性なのではなく、その或る」つ又は多々の部分が動物の本性なのだから」

17 cf. Brentano, *Psychologie des Aristoteles* 53.

18 De An. B2. 414-28. A3. 407b13ff.

19 De An. B2. 413a11ff. 3.414b20ff. 415a12.

20 Platon, *Phaedo*. 109c9-11. 「それではそれが内在することによつて肉體を生かすものは何であるか答へ給へ」「靈魂によつて生かす」Crt. 399D. 「今私に思ひ當るままに言ふならば、靈魂と云ふ名を用ひた人々はそれが肉體に存する時にはその肉體によつて生命の原因である如きものを意味したるのであらうと思はれる。」之に對應してアリストテレスには次の様な言葉をなす。 De An. Ar. 402a6. 「何故ならば(靈魂は)或の意味で生物の原理であるから」B4. 415b8. 「よつて靈魂は生きた物體の原因であり原理である。」B2. 414a12. 「靈魂とはそれによつて我々が生きたり感覺したりすることのなるのである」Part. An. Ar. 641a18. 「すべてのこの靈魂が離れ去つたならば生物は存在しなかつ、その如何なる部分も單なる形骸としてより他には殘らなざること、恰も物語にある動物が石にせられた如きものである。」之によつて兩者の思想的關聯は充分に明かである。

21 Platon, *Rep.* 4. 435-442. 6. 504A. 8. 550A. 9. 571. 980E. 981 Tim. 69E-72. 89E. Leg. 9. 863.

22 M. M. Ar. 118a23.

23 De An. I9. 432a25.

24 Hicks' Note on 432a26. 411b25.

25 Arim, *Das Ethische im Aristotelischen Topik* 6-12. Strümpel, *Geschichte der theoretischen Philosophie* 324ff. cf. Brandis, *Griechisch-Römischen Philosophie*. II. b, 1168f. Zeller, *Philos. d. Griechen*. II. 2. 499. N. B. 5. トリヌテレーヌの次の言葉を亦アリストテレスの言を要書して見る様に思はれる。 De an. I9. 432b2. 「以上の他に欲求的部分(*opexivwv*)がある。それは概念的にも能力的にも凡てのものと異つてゐる様に思はれる。そして之を分裂させることは不合理である。何故ならば(さうすれば)有理的部分には願望(*Proskyta*)が生じ無理的部分には欲望(*Emphyta*)氣概(*Dequv*)が生ずるからである。だが若し靈魂が三つに分たれるとその各の中に欲求(*opexivwv*)があることにならなければならない。」

- 26 De An. Ar. 403b1. B2. 413b13. 14 429a10. E. N. Ar3. 1102a28.
 27 實體的 *śūta* と云ふ語を用ひなかつたのは實體の多義性、殊に概念も亦實體の一つの意味とされたことによるであらう。
 28 De An. B2. 413b29. 「概念的に別であるとは明かである、何故ならば感覺することと思索することとが別である以上、
 感覺的であることと思索的であることは別だからである。即ち他の各に就ても亦同様である。」
 29 De An B3. 414b20.
 30 Brentano, Op. cit. 57ff. De An. B2. 413b32. 「同じく生物の中の或るものは之等のものが凡て屬するが、或るものは之等の中にあるものが屬し、他の或るものは唯一つだけが屬する。そして之が生物の相異を形成するのである。」
 31 De An. Ar. 403a10. B1. 413a3. 註三九參照。
 32 De An. 14. 429b5. 「何故ならば感覺的部分は肉體なしにはありえないからである。」
 33 De An. Ar. 403a3ff.
 34 De An. Ar. 403a16: b17. E. N. B4. 1105b20.
 35 De An. A5. 409b14. 「ヤウと著しむたが此の論からして靈魂の受動と能動を例へば勘考や感覺や快や苦やその他この様なものを説明しやうと試みるならば、このことは明白にならう。」
- 36 De An. 17. 431a16. De Memor. 1. 449b31.
 37 De An. 18. 432a8. a13.
 38 De Sensu. 6. 445b16.
 39 De An. B2. 413b24.
 40 De An. A4. 408b29. cf b24.
 41 Gen. An. B3. 736b27.
 42 De An. 14. 429b3.

(未完)